

知的障害者の自己決定の選択行為形成に向けた学習支援

-生涯学習機会での実践を通して-

企画者	今枝 史雄 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)
司会者	城田 和晃 (東京都立矢口特別支援学校)
話題提供者	小笠原 拓 (株式会社ドコモ・プラスハーティ) 今枝 史雄 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)
指定討論者	原 智彦 (あきる野市障がい者就労・生活支援センターあすく) 菅野 敦 (東京学芸大学教育実践研究支援センター)

KEY WORDS: 知的障害者 自己決定 生涯学習支援

【企画趣旨】

成人期知的障害者の近年のキーワードとして自己決定が挙げられている。Wehmeyer, M. et al. (1996)は自己決定には問題解決能力が関係するとしているため、適切な自己決定に向けて問題解決能力の形成が必要であると言える。そこで今枝ら(2017)はこれまで提言されてきた自己決定及び問題解決プロセスを踏まえ、問題解決プロセスとの関連からみる「自己決定の選択プロセス」を提案した。プロセスには、選択者の問題解決能力に関わる「選択肢(対象物)の理解(以下、問題理解)や、選択者の選好による「観点の重み付け(妥協点の検討)」などが含まれている。

これまでのわが国の知的障害者の自己決定研究では自己決定に関わる能力の学習方法に関わる実践的研究はほとんど行われていない(興那嶺ら, 2010)。さらに、知的障害者の問題解決研究でも自己決定の選択プロセスに含まれる問題理解のような論理的な操作を伴う課題もほとんど取り組まれていない。しかし、条件推論課題を用いた幼児研究(大宮, 2008)を参考にすると、論理的な操作の困難な知的障害者でも、提示方法の工夫などを行うことで論理的な操作を伴う自己決定の選択プロセスの遂行が可能になることが示唆される。

以上を踏まえ、成人期知的障害者の生涯学習支援の取り組みであるオープンカレッジ東京では、知的障害者の学習特性を踏まえた「自己決定の選択プロセス」を基に講座を開催している。講座では、学習者の日常生活に関わる課題(以下、日常生活課題)と学習者の既有知識の少ない課題(以下、未知課題)の2課題を題材として取り上げている。

本シンポジウムでは「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を紹介し、自己決定の選択行為の形成を目的に取り組んでいる「日常生活課題」「未知課題」を題材とした2講座を報告するとともに、それぞれの講座の自己決定の選択プロセスの遂行状況について検討することを目的とする。

【話題提供者の趣旨】

1. 知的障害者の自己決定の選択プロセスについて (今枝史雄)

田中ビネー知能検査の項目分析より、知的障害者は二つ以上の選択肢を比較する際、自ら観点を抽出することが困難であることが明らかになっている。こうした知的障害者の知的機能の特徴と先行研究で指摘される学習特性の特徴を踏まえ、「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を提案する。選択プロセスは「問題発見」「問題理解」「計画」「妥協点の検討」「選択」「振り返り」の6プロセスが含まれており、「問題理解」の中にはさらに「要素の抽出」「要素の整理」「観点の命名」「特定」「自己説明」の5プロセスが含まれている。それぞれのプロセスの詳細と、その支援ツールであるマトリックス表の紹介を行う。

2. 「日常生活課題」を題材とした講座の取り組みを通して (小笠原拓)

知的障害者にとって、契約行為に関わる自己決定は重要な支援課題である。本講座は受講生にとって身近である「携帯電話の契約場面」を設定した。1ヶ月の支出限度額を設定し、携帯電話の機能・価格、その他の支出とのバランスを比較し、契約する携帯電話を選択する課題を設定した。

知的障害者 22名(平均 CA35.5歳±6.8, 平均 MA7:07歳±1:07)に対して「問題理解」ではマトリックス表に契約する携帯電話の機能・価格と支出限度額を基に、その他の支出(買い物・外食など)を整理した。自分が契約したい携帯電話の選択後にはフローチャートを使用し、なぜその携帯電話を契約したいのか「振り返り」の活動を実施した。以上のワークは携帯電話の価格を変更することで2度実施した。ワークを進めるなかで活動の達成率は向上し、選択に関する説明(振り返り)も的確にできるようになった。

一方、実際の日常生活における自己決定は問題を自ら発見することから始まる。今後、自己決定において選択肢を比較する際の観点づくりにも繋がる「問題発見」を講座内でのように設定していくか検討が必要であると考えている。

3. 「未知課題」を題材とした講座の取り組みを通して (今枝史雄)

自己決定には進路先の決定、居住先の決定など、未経験、もしくは既有知識の少ない事物・事象を選択する機会も含まれている。よって、自己決定の選択プロセスを踏まえ、未知課題を題材とした講座を実施した。今回は「一番強いと思う昆虫の選択」という課題を設定し、選択する昆虫(選択肢)は「モンシロチョウ」「トンボ」「バッタ」、比較する観点は「飛ぶ速さ」「飛ぶ時間」「(集団)行動」とした。3種の昆虫はいずれかの観点で最も有利になるよう設定し、自分ならどの観点に重きを置き、昆虫を選択するのかを問うた。

知的障害者 22名(平均 CA32.1歳±6.8, 平均 MA8:01歳±1:86)の自己決定の選択プロセスのプロセス別の達成率を算出したところ、「妥協点の検討」や「選択」は対象者全員が達成していた。また、「要素の抽出」及び「観点の命名」では観点をヒントとして提示すれば、多くの対象者が要素を正しく抽出したり、要素間の共通点に気づき整理したりすることができた。今後の課題としては選択の合理性を問う「振り返り」の支援方法の検討が挙げられる。

【指定討論者の趣旨】: 原智彦・菅野敦

話題提供を受け、2名の指定討論者には、知的障害者の①成人期の自己決定の重要性について、②自己決定に関わる能力を形成するための学習支援について、といった2つの視点を再度問題提起してもらい、議論を深めたい。(IMAEDA Fumio, SHIROTA Kazuaki, OGASAWARA Taku, HARA Tomohiko, KANNO Atsushi,)